

19 世紀スペインにおけるレオン大聖堂：
「大修復」工事をめぐって

**The Cathedral of León in 19th Century Spain:
A Major Restoration Project**

久米 順子

東京外国語大学大学院総合国際学研究院

KUME Junko

Institute of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

序論

1. 古都レオンと大聖堂の造営
2. 19 世紀の「大修復」（1868-1901 年）
3. 修復方針の対立
 - 3.1. 様式統一主義と保存主義
 - 3.2. 聖歌隊席の移動
 - 3.3. モニュメント孤立主義
4. 聖俗の対立

結論：大聖堂は誰のものか

キーワード：レオン、ゴシック式大聖堂、修復、19 世紀、文化遺産、文化政策
Keywords: León, Gothic Cathedrals, Restoration, 19th Century, Cultural Heritage, Cultural Policy



本稿の著作権は著者が所持し、クリエイティブ・コモンズ表示4.0国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

要旨

スペイン北西部に位置する古都レオンの中心部に建つレオン大聖堂は、現在スペインでもっとも美しいゴシック聖堂のひとつと言われる。しかしそれが、19世紀に行われた「大修復」によって、ゴシック期の建造後に付加された建築要素が徹底的に除去された結果であることは、あまり知られていない。本稿では、レオンの主任修復建築家を務めたマティアス・ラビーニャ、アンドレス・エルナンデス・カリエホ、フアン・デ・マドラソ・イ・クンツ、デメトリオ・デ・ロス・リオス、フアン・バウティスタ・ラサロが、どのような修復理念のもとで何を行ったかを整理し、当時のヨーロッパの建築修復思想の潮流に照らして考察する。さらに、1844年にスペイン国定史跡第一号の指定を受けたレオン大聖堂の修復工事を、複数のアクターとその利害の対立が露呈した場として捉え、政治的混乱の渦中にあった19世紀後半のスペインにおける文化政策を代表するエピソードとして分析する。

Abstract

The Cathedral of León, located in the center of that ancient city, is said to be one of the most beautiful Gothic cathedrals in Spain today. However, it is not widely known that this is the result of a “major restoration” carried out in the 19th century that thoroughly removed architectural elements added after the Gothic period of construction. This paper summarizes the activities and restoration philosophies of each chief restoration architect at León (Matías Laviña Blasco, Andrés Hernández Callejo, Juan de Madrazo y Kuntz, Demetrio de los Ríos y Serrano, and Juan Bautista Lázaro de Diego), and discusses the results of their work in light of the trends in European architectural restoration thought at the time. Furthermore, the restoration of the Cathedral of León, which was designated the first Spanish National Monument in 1844, is analyzed as a place where conflicts among multiple actors and their interests were exposed. We aim to clarify this episode as a very representative one of cultural policies in late 19th century Spain, a country which at that time was in the midst of political turmoil.

序論¹⁾

スペイン北西部に位置する古都レオンの中心部に、聖母マリアに捧げられた大聖堂が建っている（図1）。「Pulchra leonina レオンの美」とラテン語の通称で呼ばれ、スペインでもっとも美しいゴシック聖堂のひとつと言われる大聖堂だが（図2）、19世紀には崩落の危機に瀕していた。1844年に国定史跡の第一号に指定され、国家予算による「大修復」が1868-1901年に行われたが、その方向性や方法を巡って議論が紛糾したことが知られている。そこで本稿では「大修復」の過程を整理し、当時の修復理念と照らし合わせて考察する。また、政治的に混乱をきわめた19世紀後

1) 本稿執筆にあたり、貴重な助言をくださった立石博高先生に感謝申し上げます。

スペインの人名は、原則として第一姓のみ、一般的な第一姓の場合には、第一姓+第二姓をカタカナ表記した。初出時のみ名を含めて記した。また、日本語での人名表記の慣習に従い、ヴィオレル＝デュク Viollet-le-Duc のように「-（ハイフン）」で繋いでアルファベット表記される複合名・姓をカタカナで記す際には「＝」を、それ以外には「・」を用いた。

本稿は、JSPS 科研費 JP17H02404 および JP18K00160 による研究成果の一部である。

半のスペインにおいて、複数のアクターとその利害の対立が露呈した場として、レオンの修復工事を捉え直してみたい。



図1 レオン大聖堂、西側正面 (2009年9月、筆者撮影)



図2 レオン大聖堂内部、聖歌隊席から西側を望む (2022年8月、筆者撮影)

1. 古都レオンと大聖堂の造営

レオンという都市は、紀元後69年以降、古代ローマ第七軍団の駐屯地として形成された。711年のイスラームのイベリア半島侵入後、856年に半島北部のアストゥリアス王国のオルドーニョ1世(850-66在位)がレオンの支配権を奪回した。彼の孫にあたるオルドーニョ2世(914-25在位)時代には、アストゥリアス王国の首都が、オビエドからカンタブリア山系を挟んで南

に位置するレオンへと移され、以降、レオン王国(ないしアストゥリアス=レオン王国)の首都となった。10世紀にレオン王国東部のカスティーリャ伯領が事実上の独立を遂げると、中世前期の間、レオンとカスティーリャは王位継承に伴う合同と分離を繰り返し、レオンは1230年に最終的にカスティーリャに合併された。

1040年頃のサンピーロ年代記によれば²⁾、オルドーニョ1世が町の南東隅にあったローマ浴場を宮殿としたが、オルドーニョ2世が大聖堂を建てるために司教フルミニオ2世にその土地を寄進し、宮廷は別の場所(現 San Salvador Palaz de Rey 聖堂)に移したという。後述する19世紀の大修復の過程で大聖堂下部からローマ時代のモザイクが発見されたことにより、この記述は裏付けられた³⁾。20世紀末には大聖堂南側広場地下が発掘され、浴場に付属した公衆便所の水路跡など、一部の遺構が今でも見学可能である⁴⁾。

浴場跡に建てられた10世紀の大聖堂は、コルドバ・カリフ国宰相アルマンソールの夏期遠征により同世紀末に破壊された後、再建され、1073年に司教ペラギウス(ペラーヨ)の手で再献堂され

2) Justo Pérez de Urbel, *Sampiro, su crónica y la monarquía leonesa en el siglo X* (Madrid: CSIC, 1952), 311.

3) Javier Rivera Blanco, *Historia de las restauraciones de la Catedral de León. "Pulchra Leonina": la contradicción ensimismada* (Valladolid: Universidad de Valladolid, 1993), 31.

4) Cripta de la Puerta del Obispo. Cf. "León romano", Guía de yacimientos arqueológicos de Castilla y León, <https://www.jcyl.es/jcyl/patrimoniocultural/GuiaLugaresArqueologicos/leon/05leon/index.html>

た⁵⁾。13世紀初頭には司教マンリケ・デ・ラーラによる二度目の再建工事が始められたが⁶⁾、完成前の1205年に司教が死去すると工事は中断した。未完成に終わったこの聖堂は、1886年の発掘によると、現在の大聖堂と同じ幅(28m)で東に3祭室を持っていたが、主な材料はレンガと瓦礫だった。レオン一帯で良質の石材が産出されないため、たとえばレオン近郊サアグンのロマネスク聖堂がレンガ造りなのも同様の理由による。レオンのゴシック大聖堂は、質の悪い石材で建てたことが、その脆弱性の一因となった。

停滞していたレオン大聖堂の再建工事再開に強い意欲を示したのは、13世紀のカスティーリヤ王アルフォンソ10世である。王室財政官であったマルティン・フェルナンデスをレオン大司教に任命し、1255年以降、経済特権の付与、王国司教会議による再建工事関係者への免罪付与といった政策で工事を後押しした。1259年にはすでに周歩廊の2つの礼拝室に司祭が任命されていることから工事は順調に進んだようで、14世紀初頭、ゴンサロ・オソリオ司教の時代には、回廊および西扉口北側の鐘塔を含め、工事はほぼ完了したとみられる。

主任建築家は、レオンの近郊都市ブルゴス大聖堂の2番目の建築家となったのち、レオンでも仕事をしたエンリケと呼ばれる工匠である。フランスで修業したか、フランス出身とみられる。彼が1277年に没するとファン・ペレスが1296ないし97年に死去するまで跡を継いだ。聖堂は三廊式で周歩廊に5祭室を持ち、四分ヴォールトの穹窿で覆われるフランス式モデルに基づいていた。実際に、レオン大聖堂の平面はランス、立面はアミアンやシャロン＝アン＝シャンパーニュの大聖堂に酷似していると指摘される⁷⁾。レオンやブルゴスは、サンティアゴ・デ・コンポステラ巡礼路のなかでもっとも栄えた通称「フランスの道」沿いに位置しており、フランスとの往来が盛んな土地であった。

その後、中世末から近世にかけて、フスキンやファン・デ・バダホス父子らが塔や回廊、礼拝室などをレオン大聖堂に付加していった。ステンドグラスや司教らの墓碑彫刻、画家ニコラス・フランセスによる主祭室祭壇画と周歩廊の壁画(15世紀半ば)、木彫の聖歌隊席(15世紀末)など内部装飾も順次施されていった。

しかし、先述のとおり、レオンのゴシック聖堂で用いられた、レオン近郊ポニャル産の石灰岩は、粘土質を多く含み、湿気に弱いという欠点があった⁸⁾。元浴場という足場の悪さも手伝い、大聖堂は絶えず修繕が必要な状態で、ついに1631年には主身廊の天井が落下するという大事故が起こった。このときレオン大聖堂参事会の求めを受けて対応策を練ったフェリペ4世の建築家ファン・デ・ナベダは、なんと交差部に高さ21.7メートルもある大円蓋をかけるという案を提案する⁹⁾。すでに時代は17世紀、バロック建築の最盛期である。エル・エスコリアル修道院の巨大なバ

5) Isidro G. Bango Torviso, “Catedral de León. Desde la instauración de la diócesis hasta la magna obra de Manrique de Lara,” ed. J. Yarza, M. V. Herráez, and G. Boto, *La Catedral de León en la Edad Media* (León: Universidad de León, 2004), 52-53.

6) Julio Puyol y Alonso, *Crónica de España por Lucas, obispo de Tuy* (Madrid: Real Academia de la Historia, 1926), 411.

7) Henrik Karge, “La arquitectura de la catedral de León en el contexto del gótico europeo,” *La Catedral de León en la Edad Media*, 113-144; María Victoria Herráez Ortega, “La construcción del templo gótico,” *La Catedral de León en la Edad Media*, 145-176.

8) Editor, “175 Aniversario como Primer Monumento Nacional,” *Revista Catedral de León* 7 (2019), 12.

9) José María Villanueva Lázaro, *La ciudad de León: El gótico* (León: Ediciones Lancia, 1986), 240.

シリカのイメージや、カステイーリャの都市セゴビアでやはり交差部にドームをかける工事が 1620 年に開始していたことがレオンの参事会員たちの頭をよぎったかもしれない¹⁰⁾。しかし 1638 年にナベダが死去したとき、工事は未完でドームの穴はふさがっていない状態だった。都市レオンは 17・18 世紀に長い停滞期に陥っており、金策の尽きた参事会は、1651 年になってようやく仮設の木製明り取りを頂部に設置させた。ナベダは死去前年の 1637 年に作成した報告書で、大聖堂の屋根の傷み、水、雪、風による甚大な影響、とりわけ壊れた窓から壁への浸水を伝えている¹¹⁾。それを長年にわたって放置し、さらに巨大なドームを最上部に載せたことで、その重さは交差部の四本の腕を伝わり、とりわけ腕の長さが短い南北の翼廊をひずませた。特に、もともと構造的に脆弱性を抱えていた南翼廊端の切妻壁に負荷が集中した。

17 世紀終わりに、この南切妻壁が焼ける火事が起こると、建築家マヌエル・コンデ・マルティネスが 1694 年にゴシック様式からバロック式の半円形の切妻壁へ変更したが、見た目を取り繕おうとするだけの処置で、その重みにより、さらに建築の状態を悪くしただけだった。

18 世紀には、バロックの名匠として知られる建築家ホアキン・チュリゲラが大円蓋の撤去を提案するも、参事会に断固拒否されたため、4 本の尖塔をドーム四方に建てることで推力（ドームの重さが横に分散しようとする力）を減らし、どうにかドームを存続させようとした。しかし、裏を返せば、さらなる重さを大聖堂の上に載せたわけで、根本的な解決策ではなかった。

1734 年には大聖堂内カルメン礼拝室のヴォールトの一部が崩落し、1755 年のリスボン大地震で全体が大きく揺れると、ついに南ファサードに亀裂が入り、大崩落を防ぐためにトリフォリウムの開口部を閉めたり、バラ窓を取り外したりするといった応急措置が取られた(図 3)。1830 年には地元の建築家フェルナンド・サンチェス・ペルテホが、これ以上、南切妻壁が崩落しないようにと控壁で補強したが、大聖堂全体が危機的な状況にあることは、もはや誰の目にも明らかだった。

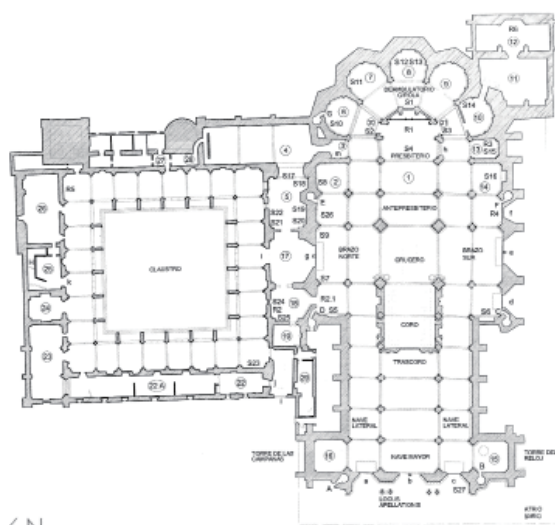


図 3 レオン大聖堂平面図（カルメン礼拝室は⑭にあたる）
(Jorge Díez García-Olalla, *La Catedral de León en 1892-1909. La Restauración de Juan Bautista Lázaro* (León: Universidad de León, 2020), 500)

2. 19世紀の「大修復」（1868-1901年）

中世に巡礼路で栄えたものの、核になる産業を欠いたまま近代に衰退したレオンは、19 世紀初頭の新ナポレオンによるイベリア半島侵攻でさらに荒廃した。レオンの市や県といった行政組織にも、教会財産を国家が接収する永代所有財産解放により打撃を受けた大聖堂参事会にも、十分な資金はなかった。そこで中央政府が修復に必要な経済的措置をとれるよう、新しい法的枠組みが必要とされ、1844 年 8 月 28 日、レオン大聖堂は初のスペイン国定史跡 Monumento Nacional de España

10) Rivera Blanco, *Historia de las restauraciones*, 73.

11) Rivera Blanco, *Historia de las restauraciones*, 81-82.

に指定される運びとなった¹²⁾。イサベル 2 世 (1833-68 在位) 治下、ナルバエス将軍政府時代のことである。ちなみに同年、レオンでは最初の公共図書館と学校が開設され、2 年後に最初の中等教育学校ができた¹³⁾。すなわちスペインが、カルリスタ戦争を始めとする政治騒乱に翻弄されながらも、近代国家として公共の文化や教育の整備を進めようとした時期であった。

しかし大聖堂に、肝心の予算は、なかなかおこななかった。ようやく 1857 年から、参事会が宗務・法務省 *Ministerio de Gracias y Justicia* に予算請求の陳情書を矢継ぎ早に送り出すが、ゴンサレス＝バラスによると「修復 *restauración*」ではなく「修理 *reparación*」の語が繰り返し使用されており、この段階でもまだ根本的大修復ではなく、傷んでいる部分だけを直せばいいと考えられていたことが分かる¹⁴⁾。参事会はレオン県議員や政府に影響力のある宗教界の要人に接近して予算確保を図り、ついに 1858 年 5 月 22 日の勅令 *Real Orden* で、大聖堂修繕費用にのみ使用可能な予算として 12 万レアル・デ・ベリオンがレオン司教に与えられた。ところが予算が確定したところで、マドリードの王立サン・フェルナンド美術アカデミーが修繕工事担当建築家を決定して担当大臣に推挙しない限り、何も事態は進まなかった¹⁵⁾。ようやくアカデミーが決めた建築家たちは、しかしレオンに足を運ぶ素振りさえも見せず、したがって予算も宙に浮いたままだった。

いよいよ大聖堂崩落の危険性が高まる中、レオン司教と参事会は 1858 年 9 月 3 日イサベル 2 世に直訴に出る。女王の直接介入により、ようやくアカデミーの建築家ナルシソ・パスクアル・イ・コロメルは、アカデミーとレオン司教に提出する報告書を作成するために同年 10 月 29 日レオンへ赴いたのだった。彼の見立ては、損傷の激しい部分、すなわちドームを支える交差部の東西穹窿とアーチだけを直して、南切妻壁を修理するための立面図を作成すれば何とかなる、ただし状態が酷いのですぐに工事にかかる必要があり、足場を組むための木材確保が必要というものだった¹⁶⁾。

まさしく同年 11 月 11 日の地震でドーム中央から身廊交差部穹窿の根元にかけて亀裂が入り、翌 59 年 1 月 31 日聖歌隊席上部の穹窿が崩落するなど、大聖堂の状態は悪化の一路を辿った。交差部に足場を組む作業が始められたものの、まだ誰にも工事の全貌は見えない状態である。1859 年 1 月 10 日に聖職者たちを構成員とするレオン大聖堂修復委員会 *Junta de restauración de la catedral de León* がようやく結成され、同年 5 月 3 日付勅令でレオン大聖堂修復工事主任建築家としてマティアス・ラビーニャ *Matías Laviña Blasco* (1796-1868) が任命された。

ラビーニャは、5 月末にレオンへ到着し、大聖堂の状態を確認すると、直ちにチュリゲラの大尖塔とナベダのドームの解体・撤去を決断、実行した。重しを取って大聖堂の負担を減らそうという意図は明らかだが、着任時すでに 63 歳、古典建築のみを学んできたこの建築家は、ゴシック建築をまるで理解していなかったと言われる。そのことは、ドームに先んじてチュリゲラの大尖塔を

12) DL, “La Catedral de León, el primer monumento nacional de España,” *Diario de León*, 27 de diciembre de 2020, <https://www.diariodeleon.es/articulo/cultura/catedral-leon-primer-monumento-nacional-espana/202012270232072073017.html>

13) Fernando Rodríguez Santocildes, “1844 entre sotanas y togas,” *Revista Catedral de León*, 7 (2019), 20.

14) Ignacio González-Varas Ibáñez, *La Catedral de León: Historia y restauración (1859-1901)* (León: Universidad de León, 1993), 110.

15) 王立サン・フェルナンド美術アカデミーは、啓蒙時代の 1752 年にフランスの王立美術アカデミーに倣って設立された。美術・建築面の中央集権化を象徴する組織で、とくに建築分野では公共建築工事の許可を担った。Ángeles Sánchez de León Fernández, “El arte medieval y la Real Academia de Bellas Artes de San Fernando” (PhD Diss., Universidad Complutense de Madrid, 1996).

16) González-Varas Ibáñez, *La Catedral de León*, 112-114.

撤去してしまった点ひとつとっても明らかだ。推力が増したため、ドームを支えるアーチが開き、柱が歪み、穹窿が崩れそうになった。なんとか大崩落を免れたのは奇蹟的幸運であった¹⁷⁾。1861年11月までにはドームが解体され、大尖塔と合わせて350トン以上の石材等が撤去された¹⁸⁾。

ラビーニャは、交差部にとどまらず、南翼廊と南切妻壁、さらにこれら南側の基礎部分までもすべて解体しようとした。参事会は渋々ながらドーム撤去に応じ、王立サン・フェルナンド美術アカデミーもラビーニャ案を承認した。しかし、これを強く批判したのが、バロック式ドームを不可欠の要素とみなした地元の名士マルティン・デ・オチョアをはじめとするレオン市民であった。批判の声は、出版の自由が認められた後、急速に発達した新聞や雑誌というメディアによって増幅された。1863年にレオンとマドリドを結ぶ鉄道が開通したことも、首都からの訪問者数の増加に寄与した¹⁹⁾。月刊誌『スペインの美術 *El Arte en España*』編集長のグレゴリオ・クルサーダ・ビジャミルは、「現在進行中の修復工事が続けば、レオン大聖堂はたちまちのうちに消失してしまうだろう」と書き立て、ラビーニャに代えてフランスの著名な中世建築の専門家ウジェーヌ・ヴィオレル＝デュクを招聘する案を提起した²⁰⁾。彼の思想とレオン大聖堂への影響は後述するが、この案は実現しなかったものの、1868年ヴィオレル＝デュクがスペインのアカデミー名誉会員に推挙され、本人が書簡にて就任を承諾する運びになったことは書き添えておきたい。

この時期には国外からの訪問者も増えた。たとえば1865年2月24日から3月1日には、イギリスに生まれ、後に東インド会社のお抱え建築家としてインドでネオ・ゴシック建築を手がけ、最後はカナダに渡った建築家リチャード・ロスケル・ベイン(1836-1901)が、彼のグランド・ツアー途中でレオンに滞在し、大聖堂内外やステンドグラスのスケッチを残した²¹⁾。同年、やはりイギリスの建築家ジョージ・エドモンド・ストリート(1824-81)もレオンを訪れている。豊富なカラー図版を含む彼の『スペインのゴシック建築についての報告』(1865年)は、ゴシック・リヴァイヴァル全般に広範な影響を及ぼした(図4)²²⁾。

さて、交差部および南側の解体工事が1863年に一段落すると、ラビーニャは南翼廊の再建計画書を宗務・法務省に送り、そこから王立サン・フェルナンド美術アカデミーに審議に回された。アカデミーは現地視察等で時間をかけた挙句、「芸術的統一性の欠如」を理由にこれを拒絶した²³⁾。特に問題視されたのが切妻最上部の形で、ギャラリーを水平に配置するラビーニャの古典建築風

17) Villanueva Lázaro, *La ciudad de León*, 257.

18) González-Varas Ibáñez, *La Catedral de León*, 129.

19) Villanueva Lázaro, *La ciudad de León*, 257; González-Varas Ibáñez, *La Catedral de León*, 140.

20) Gregorio Cruzada Villamil, “Restauración de la Catedral de León,” *El Arte en España* (XIX, año II, Madrid, 19 de noviembre de 1863), 29.

21) Francesca Español Bertrán, “La Catedral de León en los dibujos de Richard Roskell Bayne (1865),” *La Catedral de León en la Edad Media*, 595-602. Cf. Richard Roskell Bayne collection, Maltwood Art Museum and Gallery, University of Victoria (Canada), <https://maltwood.uvic.ca/bayne/>

22) Fabian López-Ulloa, “Las teorías del gótico y su representación gráfica en España el último tercio del siglo XIX. Un estudio sobre: *Some Account of Gothic Architecture in Spain*, de George Edmund Street,” (PhD Diss., Universidad Politécnica de Madrid, 2016).

23) Ignacio González-Varas Ibáñez, *Conservación de bienes culturales. Teoría, historia, principios y normas* (Madrid: Cátedra, 4ª ed. 2005 (1ª ed. 1999)), 178.

の処理は、概して保守的なアカデミー会員たちの目にさえ、時代錯誤に映ったようである²⁴⁾。

解体工事への鳴りやまぬ批判と再建工事の中断は、老齢のラビーニャにことさら堪えたのか、彼は1868年1月に世を去った。長年シンボリック的存在であったドームを撤去したことで、「後から付加されたものをそぎ落とし、古いものだけを残す」というレオン大聖堂修復工事の根本的な方向性を、はからずも彼が定めたことになったのだった。

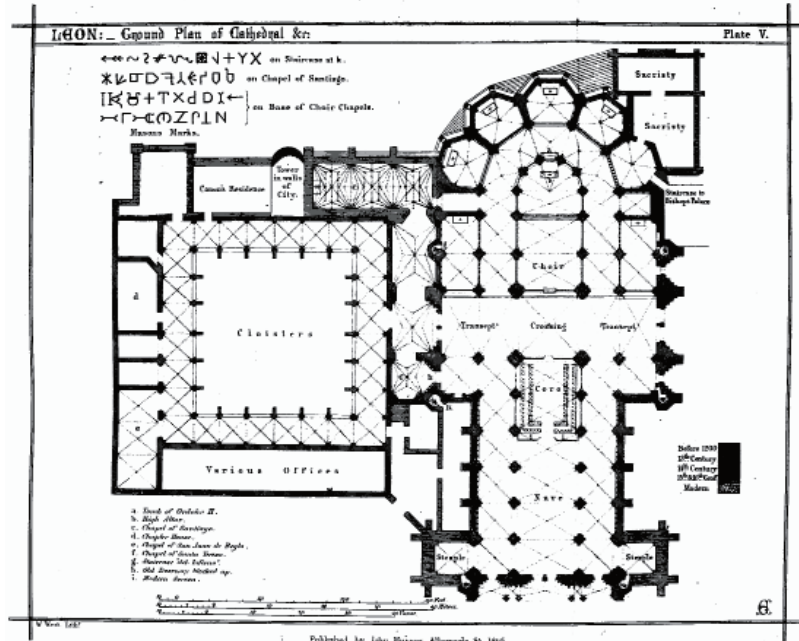


図4 ジョージ・エドムンド・ストリートによるレオン大聖堂平面図、1865年
(George Edmund Street, *Some Account of Gothic Architecture in Spain* (London: John Murray, 1869).
Accessed September 20, 2023, <https://www.gutenberg.org/ebooks/41040>)

ラビーニャの死後に主任建築家として起用されたのは、アンドレス・エルナンデス・カリエホ Andrés Hernández Callejo (1820-?) である。彼はアビラのサン・ピセンテ聖堂など中世建築の修復に実績のある建築家であったが、1868年2月に任命されて3月初旬にレオンに到着するも、7月24日には工事を中断し、12月に正式に解任されている。わずか数カ月の間に、彼とレオン司教・参事会との関係が修繕不可能なまでに悪化したためであった。その理由については後述するが、双方ともに女王に訴え出て、王命でアカデミーが調査に乗り出し、聖職者側の肩を持つ報告書が提出されて建築家は解任となった²⁵⁾。

1869年2月21日付で任命された新主任建築家は、19世紀のスペイン画壇を支配したマドラーソ家出身のファン・デ・マドラーソ Juan de Madrazo y Kuntz (1829-80) である。フランスのジャック＝ルイ・ダヴィッドの元に留学した新古典主義の画家ホセ・デ・マドラーソの末息子にあたり、兄たちも画家や美術評論家で、この一族が王立サン・フェルナンド美術アカデミー会長やブラド美術館長といった要職を占めた。ファン・デ・マドラーソは、1844年に開設されたマドリード建

24) González-Varas Ibáñez, *La Catedral de León*, 145-146.

25) González-Varas Ibáñez, *La Catedral de León*, 162-165.

築学校で歴史主義教育を受けた建築家の第一世代のひとりで²⁶⁾、ジャン＝パティスト・ラシユスやヴィオレル＝デュクから当時最新のフランス修復理論に通じ、合理主義とロマン主義精神に基づいてゴシック建築を深く研究していた。スペインのソリア産およびバルト海産のマツ材に、バスク地方およびアストゥリアス地方産の鉄鋼、イギリス・フランス・カタルーニャ産のネジを用いて天井最上部まで届く壮大な足場を組み²⁷⁾、推力をコントロールして建物を支える屋根組を作り上げ、交差部を再建してレオン大聖堂全体のバランスを回復することに成功した。また、中世の趣を残す北側正面をモデルとして、ラビーニャが解体した南部分を三角形の切妻壁で再建した²⁸⁾。

しかし合理主義的・進歩主義的な彼の言動は、参事会、司教、レオンの保守層の反感を買った。「反カトリック的」「プロテスタント」「フリーメーソン」「無神論者」との誹りを受け²⁹⁾、1879年8月に聖職者側との対立が決定的となると、大臣やアカデミーなどの介入も虚しく10月21日に解任され、数か月後に世を去った。マドリードにおける一族の名声にも関わらず、王命による解任にまで至った理由のひとつは、レオン司教、マドラーソの両者がともにまったく譲らぬ姿勢を堅持したことにある。それに加えて、後に詳しく分析するが、政府と教会の関係という、当時のスペイン社会が見て見ぬふりをしようとした論点に触れる問題だったために、幕引きが急がれた節がある。

マドラーソの死後、レオン大聖堂修復工事の担当建築家は、クーバス侯（フランシスコ・デ・クーバス）やシメオン・アバロスらの相次ぐ任命と辞任を経て、ようやく以前から大臣に自薦していたデメトリオ・デ・ロス・リオス Demetrio de los Ríos y Serrano (1827-92) に決まった。彼はマドラーソとともにマドリード建築学校で学んだ第一世代の卒業生で、マドラーソと同様、やはり芸術・学問の分野で著名な一族の出身であった。彼の兄アマドール・デ・ロス・リオスは、王立歴史アカデミーならびに王立サン・フェルナンド美術アカデミー会員としてスペイン国立考古学博物館の創設に尽力した歴史家・考古学者・文学家で、デメトリオも家庭環境と受けた教育から歴史・考古学の素養を持っていた。中世建築とヴィオレル＝デュクの理論に精通していた点もマドラーソと共通しており、ロス・リオスの修復工事路線は、基本的にはマドラーソが敷いたルールを延伸する形となった。ただし彼は政治的には保守派で、レオンの聖職者たちとは終生良好な関係を保った。彼の在任中の12年間は予算も比較的潤沢で、工事が順調に進んだ時期となった。彼の担った主な仕事は、16世紀にプラテレスコ様式で作られた西側正面の切妻壁の解体およびネオ・ゴシック様式による再建工事、交差部ならびに中央身廊の穹窿の再建工事終了、バロック時代に付加された装飾の撤去と、ネオ・ゴシック様式による小尖塔や窓台といった装飾の付加、舗床のやり直しなど多岐にわたる。1885年から行われた舗床工事ならびに発掘作業（そして古代ロ

26) スペインでは、建築家の育成は同アカデミーが一手に担っていたが、1844年に美術から分離し、マドリード建築学校が設立された。産業革命によって急成長を遂げたバルセロナにも1870年に建築学校が新設され、ガウディはその2期生(1878年卒業)にあたる。鳥居徳敏「ガウディの学業成績」『麒麟』(神奈川大学) 15 (2006): 13; José Manuel Prieto González, *Aprendiendo a ser arquitectos. Creación y desarrollo de la Escuela de Arquitectura de Madrid (1844-1914)* (Madrid: CSIC, 2004).

27) Rivera Blanco, *Historia de las restauraciones*, 225.

28) González-Varas Ibáñez, *La Catedral de León*, 180-255.

29) マドラーソ自身は理神論者 *deísta* を自任し、必ずしも精神的なものを否定したわけではなかった。González-Varas Ibáñez, *La Catedral de León*, 271.

ーマ浴場跡の発見)には、建築家のみならず歴史家・考古学者としての彼の関心がよく窺える³⁰⁾。

19世紀の「大修復」最後の主任建築家となったのは、レオン出身のフアン・バウティスタ・ラサロ Juan Bautista Lázaro de Diego (1849-1919)である³¹⁾。1874年にマドリッド建築学校で建築家資格を取得後、アビラやトレドで司教区建築家として経験を積んでいた。彼は、排水システムをはじめ、各所の未完工事を完遂したが、特筆されるのは、ステンドグラスの修復である。彼は大聖堂前にステンドグラス工房を設置し、大聖堂内の現物を間近に観察しながら実験を繰り返して、古いステンドグラスの修復と、欠落部を補填するための新規制作を行った³²⁾。ひとたび技術を確立した後の3年間で彼が修復したステンドグラスの面積は800㎡以上に及ぶ³³⁾。現在のレオン大聖堂内のステンドグラス総面積が1800㎡というから、実に半分弱に手を入れたことになる。この業績はラサロに多くの受賞や王立サン・フェルナンド美術アカデミー会員への選出といった榮譽をもたらした³⁴⁾。

1901年4月に最後のステンドグラスがはめ込まれ、数十年におよぶ「大修復」はいよいよ終わりとなった。5月27日、レオン司教フランシスコ・ゴメス・デ・サラサールによりレオン聖堂は聖別された³⁵⁾。記録に残る限りではレオンのゴシック聖堂はここで初めて聖別されたことになる³⁶⁾。レオン市では3日間にわたって祝祭が繰り広げられ、「国家的大事業」の終了が寿がれたのだった。

3. 修復方針の対立

3.1. 様式統一主義と保存主義

初の国定史跡となったレオン大聖堂修復工事は、その後のスペインの歴史的モニュメント修復のモデルとなったと言われる。そういうと聞こえはよいが、実際には、前例を欠いたということで、あらゆる手続きに時間を要した。たとえば1860年に初代主任建築家のラビーニャが修復計画書を宗務・法務省に提出したとき、大臣はアカデミーへ書類を回し、そこでの審議と承認を経たのち、勅令をもって承認されたが、このときはじめて主任建築家は3か月ごとに報告書・決算書をマドリッドへ送るべきことが定められた³⁷⁾。さらに、工事に入る前に修復計画を立てておくことや、安全と資材管理のために工事中は関係者以外立ち入り禁止にすることなど、現代の我々にとっては当然であることが、場当たりの開始されたレオン大聖堂修復工事では当たり前ではなかった。

とりわけ修復方針は、結果的にそのときどきの主任建築家の思想が強く反映された。無論、何

30) González-Varas Ibáñez, *La Catedral de León*, 338-341.

31) Jorge Diez García-Olalla, *La Catedral de León en 1892-1909. La Restauración de Juan Bautista Lázaro* (León: Universidad de León, 2020); Aránzazu Revuelta Bayod, “La restauración de las vidrieras medievales de la Catedral de León a finales del siglo XIX,” *La Catedral de León en la Edad Media*, 603-612.

32) González-Varas Ibáñez, *La Catedral de León*, 443-444.

33) Rivera Blanco, *Historia de las restauraciones*, 317.

34) González-Varas Ibáñez, *La Catedral de León*, 429.

35) Rivera Blanco, *Historia de las restauraciones*, 319; Villanueva Lázaro, *La ciudad de León*, 260.

36) それ以前の記録に残るのは916年のオルドーニョ2世のロマネスク聖堂聖別とペラーヨ司教の1103年の聖別のみである。

37) González-Varas Ibáñez, *La Catedral de León*, 135.

もかも建築家の思い通りになったわけではない。むしろ彼らは、立案した修復計画を（担当大臣を通じて）追認する王立美術アカデミー、レオン司教をはじめとする聖職者たち、レオン市民、新聞や雑誌の書き手といった多様なアクターの意向に翻弄されたわけだが、ここではまず、主任建築家たち自身の中世建築に対する修復思想を確認しておきたい。それは、大きく様式統一主義と保存主義に二分することができる。そしてこの両者は、19世紀から20世紀にかけてのヨーロッパにおける修復思想の変転に対応する考え方でもあった。

様式統一主義の思想と実践を代表するのは、フランスのヴィオレ＝ル＝デュクである。彼の思想は、代表作たる全10巻の『中世建築事典』中の一項目「修復 Restoration」の冒頭部分、以下の名高い一節に端的に現れている。「建物を修復するということは、維持することではないし、修繕することでもないし、改修することでもない。それは、過去のいかなる瞬間にも存在しなかったかもしれない完全な状態に、建物を戻すことである」³⁸⁾。したがって彼の実践には、単にひとつの建物のなかで様式を統一する作業にとどまらず、「過去のいかなる瞬間にも存在しなかったかもしれない完全な状態」を探求する建築家による「創造的／想像的な修復」が多分に含まれることになった³⁹⁾。

スペインにおいては、マドリード建築学校の校長アントニオ・デ・サバレータが、ヴィオレ＝ル＝デュクの著作を、同時代のスペインの建築家たちに絶大な影響力を持った雑誌『スペイン建築紀要 *Boletín Español de Arquitectura*』に翻訳掲載したことで広まった⁴⁰⁾。レオン大聖堂修復工事では、マドラーソとロス・リオスがヴィオレ＝ル＝デュクの思想に深く傾倒していた。前者は1879年に、修復工事の目的は古い建造物に十分な耐久性を与えることだが、新しい建設によってその建造物が様式的に統一された完璧な一体になるべきであると説明している⁴¹⁾。また、後者は、大聖堂の石材・素材が新しいものに替えられれたとしても、「形」が保存され取り戻されるならば問題ないという立場を表明した。建物の「様式的統一」を崩す要素を外科手術のように取り除くことが何よりも優先されるべきであり、そのためには偽造の危険を冒すことも厭わないというのである（図5）。さらにロス・リオスは、中世以降、一度も実現されたことはなく計画されたという証拠もないが、当初計画されたに違いないし計画されてしかるべきものとして、レオン大聖堂の交差部の上に尖塔を構想しさえした⁴²⁾。ヴィオレ＝ル＝デュクによるパリのノートルダム大聖堂尖塔案を踏襲したこの構想は、しかし、アカデミーによってきっぱり拒絶されるにいたった。かつてなかったものを新たに建てるのが修復工事として行き過ぎであるとの判断に加えて、建物の脆弱

38) Eugène Emmanuel Viollet-le-Duc, *Dictionnaire raisonné de l'architecture française du XI au XVI siècle* (Paris: Morel, 1875), VIII:14; 加藤耕一『時がつくる建築 リノベーションの西洋建築史』（東京大学出版会, 2017）, 243.

39) 加藤『時がつくる建築』, 244; 羽生修二『ヴィオレ・ル・デュク [歴史再生のラショナルリスト]』（鹿島出版会, 1992）.

40) González-Varas Ibáñez, *Conservación*, 175.

41) “(…) dotar de la suficiente resistencia a las fábricas antiguas que con las de nueva edificación han de formar en su día un todo completo y uniforme” . Juan de Madrazo y Küntz, *Presupuesto de obras parciales* (León, 15 de abril de 1879) (González-Varas Ibáñez, *Conservación*, 176, nota 33).

42) González-Varas Ibáñez, *La Catedral de León*, 364-370.

性に影響し得る付加物を交差部に建てることは許されないという理由であったようである⁴³⁾。これはレオン大聖堂に大修復の必要が生じた原因を思い返せば、もっともな判断である。



図5 デメトリオ・デ・ロス・リオス時代のレオン大聖堂正面。修復箇所の石材の白さが際立つ
(Demetrio de los Ríos y Serrano, *La Catedral de León* (Madrid: S. Corazón de Jesús, 1895), I: 7.
Accessed September 20, 2023, <https://bibliotecadigital.jcyl.es/es/consulta/registro.do?id=13066>)

ヴィオレール＝デュク主義は、19世紀末から20世紀初頭のスペインに顕著な影響を与えた。アドルフォ・フェルナンデス・カサノバによるセビーリャ大聖堂修復工事（1880-1901）、アウグスト・フォン・イ・カレーラスによるバルセロナ大聖堂正面建造工事（1890-1913）、ロス・リオスの娘婿ピセンテ・ランペレス・イ・ロメアによるブルゴス大聖堂修復工事（1892-1914）など、スペインのあらゆる地域にその影響を垣間見ることができる。

しかし、この考え方への疑義が1880年代に入ると呈されるようになった。レオン大聖堂最後の修復建築家ラサロは懐疑派の代表格と言える。彼の考えは「つるはしは、よき修復家が七つの鍵の下にしまっておくべきものである」という文章に端的に現れている⁴⁴⁾。「理想」の実現を求めて建築へ過度に介入することを避け、歴史的な要素すべての保存を提案する—ないし「時間を巻き戻

43) González-Varas Ibáñez, *La Catedral de León*, 368.

44) “La piqueta es una herramienta que el buen restaurador debe tener guardada bajo siete llaves.” González-Varas Ibáñez, *La Catedral de León*, 427.

すことを否定し、時間を止めることを理想とする⁴⁵⁾—「保存」の立場である⁴⁶⁾。その思想的支柱はイギリスのジョン・ラスキン (1819-1900) で、彼の『建築の七燈』中の一節「修復とは…建物が被りうるもっとも完璧な破壊のことである」がよく知られるところである⁴⁷⁾。

事後的に振り返ってみれば、西洋世界の修復思想は疑いなく様式統一主義から保存主義に傾いていった。保存の考え方に重きを置いた「アテネ憲章」が1931年に第1回歴史的記念建造物に関する建築家技術者国際会議で採択され、それを受けてスペインで制定された1933年の「文化財保護法 Ley de Protección del Tesoro Artístico Nacional」は、1985年に現行法に変わるまで、フランコ独裁時代も含めて約半世紀にわたり効力を保った⁴⁸⁾。

レオン大聖堂に携わった建築家たちの立場の変化も、こうした流れの中に位置付けられる。ただ、レオン大聖堂の場合には、修復開始時に中央ドームが撤去されたことで保存への道が閉ざされたこと（そもそもドームごと保存するのは当時の技術的に困難であった）、またラサロの登場前にすでに建物全体の修復作業が進んでいたことで、結果的には歴史的な付加物の排除とフランス・ゴシック様式への「回帰」がラディカルに実施された例となったのである。

以下では、こうした修復思想の違いがとくに先鋭化した点として、聖歌隊席の移動、そして大聖堂を周囲と切り離すモニュメント化の問題を見ていこう。

3. 2. 聖歌隊席の移動

現在レオン大聖堂で見られる上下二段構成の大掛かりな聖歌隊席は、15世紀末にファン・デ・マリーナスやディエゴ・コピン・デ・オランダらが手掛けたもので、旧約聖書の登場人物や聖人たちの姿と、きわめて世俗的で諧謔心に溢れた動物などのモチーフが、暗褐色のクルミ材に彫り込まれている。聖堂造営当初はフランスの大聖堂式に祭壇よりも東側の内陣に置かれていたが、1746年にスペインの多くのゴシック聖堂に倣って身廊中心に移動された⁴⁹⁾。西側正面から祭壇までを見通せる吹き抜けの大空間—建築史家チュエッカの言葉を借りるならば「厳格な焦点性をもって統制化された大空間」—を嫌って、幅と高さのある聖歌隊席を身廊中央に据えたことは、スペインのゴシック聖堂の特質のひとつに数えられてきた (図6)⁵⁰⁾。「建造当初の姿を取り戻す」ことを目標に掲げた場合、聖歌隊席の場所が問題となるのは必然であった。

フランス・ゴシック聖堂の定番通りに聖堂内陣へ戻す移動を立案したのはロス・リオスだが、彼自身の死のため、計画案の提出には至らなかった。それでも、もとあった聖堂内陣への帰還を推す声は強く、1901年にレオン大聖堂が再開してからも、オビエド大聖堂と同様に聖歌隊席の移動がなされるべきだという新聞キャンペーンが行われたほどだった。しかし聖歌隊席は身廊中央にあるのがスペイン・ゴシックの特質と考えるアカデミーは、内陣への移動に反対した。ラサロは、

45) 加藤『時がつくる建築』, 261.

46) González-Varas Ibáñez, *Conservación*, 180.

47) ジョン・ラスキン『建築の七燈』杉山真紀子訳 (鹿島出版会, 1997).

48) González-Varas Ibáñez, *Conservación*, 511-535; Pedro Navascués, “La arquitectura (del s. XIX),” *Manual del Arte español* (Madrid: Sílex, 2003), 761.

49) González-Varas Ibáñez, *La Catedral de León*, 422, nota 212.

50) フェルナンド・チュエッカ『スペイン建築の特質』鳥居徳敏訳 (鹿島出版会, 1991), 112.

前任者ロス・リオスが残した未署名の計画書を丹念に検証したのち、身廊中央に留まらせる決断を下した⁵¹⁾。こうして、一部からは原初ゴシックへの回帰主義が根強く主張されながらも、結果的に「スペインらしさ」が選択された。これは、最終判断を下したラサロが保存主義者であったことに加え、スペインのナショナル・アイデンティティを重視する風潮が高まっていたことと無関係ではないだろう。そもそも19世紀のスペインでレオンをはじめとするゴシック大聖堂が注目された背景には、7世紀の西ゴート王国時代がカトリック・スペインの起源に位置付けられ、同根の語源ゆえに、中世後期のゴシック建築が西ゴートと混同されたという当時特有の歴史認識があった。レオン大聖堂の評価と、カトリックを紐帯とするひとつの統合体としてのスペインというイサベル2世期に打ち出されたラフエンテ史観との関係を論じることは本稿の域を超えるが、別途検討されねばならない問題点である。



262.—CATEDRAL DE LEÓN: interior (p. 226).

Fol. Gracia.

図6 レオン大聖堂内部、中央身廊の聖歌隊席、20世紀初頭頃
(Manuel Gómez-Moreno, *Catálogo monumental de España: Provincia de León* (Madrid: Ministerio de Instrucción Pública y Bellas Artes, 1925-1926 = ed. facs., 2 vols., León: Nebrija, 1979), II: lám. 262)

3. 3. モニュメント孤立主義

現在、レオン大聖堂を訪れる人の多くは、^{アンチャ}大通りと呼ばれるメイン・ストリートを東へ向かい、レグラ広場から大聖堂の西南側を仰ぎ見ることになる(図7)。そのまま西口正面へ足を進めると気が付かないが、地図を見れば、大聖堂の東側がローマ時代に築かれた外壁と重なっていることがわかる。実は何世紀もの間、大聖堂はレオンの旧市街の外壁と一体化していたのである。城壁の内外をつなぐ司教門 Puerta del Obispo によって、今では大通りを挟んで大聖堂の南側にある司教館とも結ばれていた(図8, 9)。

司教門が取り壊されたのは、1911年マヌエル・カルデナスの手によってであったが、もとは1880年代にロス・リオスが構想していた。ロス・リオスは、当初の正確な建造年代および機能は不明ながら長年「宝 Tesoro」と呼ばれていた塔を、大聖堂南側修復の過程で、1883-84年に解体した。この解体は議論を呼び、修復工事は中断、中央政府の介入にまで至った。しかしアカデミーで確固たる地位を確保していたロス・リオスが自分の判断を正当化する報告書を作らせ、大臣もそれを追認したのだった。カルデナスは、約30年後に隣接する司教門を取り壊すと、16世紀の建築

51) González-Varas Ibáñez, *La Catedral de León*, 404-422.



図7 レオン大聖堂、西側正面および南側外観 (2022年8月、筆者撮影)



図8 16世紀のレオン市の模型 (一部)。Centro de interpretación del Reino de León (2022年8月、筆者撮影)



図9 レオン大聖堂、かつて司教門があった場所から東南側を撮影。大聖堂が城壁と一体化していた名残は感じられない (2022年8月、筆者撮影)

家ファン・デ・バダホスによる大聖堂東端の香部屋（聖具室）と小礼拝堂の解体まで主張したが、これは実現しなかった⁵²⁾。両者ともに、純粋なゴシック大聖堂を甦らせるために後世に付加されたものを削ぎ落とそうとしたわけだが、レオン大聖堂のように長い年月の間に増改築が重ねられてきた建造物の場合、ひとつを削ったところで、また次の「余剰物」が目についてしまい、きりがなかったことが理解される。

「古い建造物は保存されるべきだが、周囲と切り離して修復されねばならない」と訴えたのはドイツの都市計画家ラインハルト・バウマイスターとされる⁵³⁾。パリでは、ラシュスらの中世建築のモニュメント化を主張する声により、サント・シャペルが隣接するパレ・ド・ジュスティスから切り離された。ほかにも、ヴィオレ＝ル＝デュクが関与したパリのノートルダム聖堂やトゥールーズのセン・セルナン聖堂、またケルンやウルムの大聖堂など、聖堂に隣接した建造物を撤去し、聖堂前広場を整備する事例が19世紀にヨーロッパ各地で相次いだ⁵⁴⁾。

歴史的建造物を周辺環境から切り離すことでモニュメント化を進める傾向にスペインで疑問の声を投げかけた最初のひとりが、建築家・建築史家・修復家レオポルド・トーレス・バルバスである。彼は1919年に発表した論考「われらが大聖堂の孤絶化」において、1889年に出版されたウィーンの建築家・都市計画家カミロ・ジッテの説の通りに、建造物の周辺も含めて保存すべきという考えを展開した⁵⁵⁾。

大聖堂周辺をどう整備するか、この点でもまた、レオン大聖堂は、同時代のヨーロッパの理論と実践例を学んだスペインの建築家たちの、一種の実験場となったのであった⁵⁶⁾。

4. 聖俗の対立

前項では、おもに建築家たちの修復方針の対立をめぐる論点を整理した。ここでは、建築家と聖職者の対立、つまり聖俗の対立という、カトリックを国教としてきたスペインが近代国家成立過程に避けては通れなかった問題を見ていきたい。

歴代のレオン大聖堂修復建築家のなかで、明白に聖職者側と衝突したのは、エルナンデス・カリエホおよびマドラーソである。エルナンデスと参事会との亀裂が決定的となったのは、聖堂内部各所で宗教儀式を続けようと工事を無視して出入りする聖職者たちに業を煮やした建築家が、カギをかけて内部を立ち入り禁止にしたためであった。現在でこそ修復現場に入れるのは工事関係者のみとの通念が存在するが⁵⁷⁾、当時はそうではなかった。安全管理も、撤去された石材や工事の

52) González-Varas Ibáñez, *La Catedral de León*, 459-478.

53) Reinhard Baumeister, *Stadt-Erweiterungen in technischer, baupolizeilicher un wirtschaftlicher Beziehung*, (Berlin: Ernst und Korn, 1876).

54) González-Varas Ibáñez, *La Catedral de León*, 469-471.

55) Leopoldo Torres Balbás, “El aislamiento de nuestras catedrales,” *Arquitectura* (año II, n. 20, Madrid, diciembre 1919), 358-362.

56) Antonio T. Reguera Rodríguez, “El desarrollo histórico-urbanístico en torno a la Catedral de León,” ed. Jesús Paniagua Pérez, Felipe F. Ramos, *En torno a la catedral de León (estudios)* (León: Universidad de León-Cabildo de la S.I.C. de León, 2004), 263-283.

57) むしろ近年では、修復現場を一般の人に開放して実際に見てもらうことで、修復事業に対する社会的理解を促そうという動きも見られる。そのときにしか経験できないという付加価値付きの新たな観光の形でもあ

道具・資材管理も、人夫たちの労務管理も、何もかもが弛緩した現場の立て直しに彼は奮起したが、聖職者の理解を得ることはできなかった。そもそもこの時期の修復委員会が、参事会員と司教、すなわち聖職者で占められていたことを想起せねばならない。主任建築家は、アカデミーの監督のもとに工事現場を率いる中間管理職的な立場に甘んじざるを得なかった⁵⁸⁾。1887年に10歳以上の非識字率が65%というスペインで⁵⁹⁾、全国でも数百名という稀有な資格保持者である建築家たちが、意のままにならない修復現場の状況に苛立ったのは想像に難くない⁶⁰⁾。

さらに、19世紀スペインの社会政治状況が、現場の混乱に拍車をかけたと考えられる。王政時代には、国家は予算を措置するものの、現地での事業執行は教会マターであるため、管轄は宗務・法務省内の司教区建造物局 *Negociado de Edificios Diocesanos* とされた⁶¹⁾。ところが、イサベル2世が国外へ亡命した1868年革命と1873年の共和国政府の成立で、事情は一変する。その間の5年間、政府と教会の関係は曖昧な状態に置かれ、レオン大聖堂の工事は実質的に停止した。共和国政府が樹立すると聖俗分離が標榜され、教会が国家の定める範囲内で、国家から独立して自らの事業を行い、不動産等を所有することを政府は認めるが、同時に国定史跡に認定されたものは政府の監督下に置かれると定められ、事務管轄は勸業省に移された⁶²⁾。レオン大聖堂修復委員会のトップは県知事 *Gobernador Civil* が務め、聖職者たちは蚊帳の外に締め出された。しかし、やがて修復委員長は名誉職として形骸化し、実権は再度レオン司教が握るようになったとゴンサレス＝バラスは指摘する⁶³⁾。

1869-79年に修復建築家の任にあたったマドラーソは、聖俗分離を求めて委員会から司教を外そうとした。「国家が勸業省を通してレオン大聖堂で遂行中の修復は、純粹に世俗事業である。その建築の価値ゆえに大聖堂を修復しているのであって、この建物の使用目的によるのではない。」「修復委員会への聖職者の介入は、まったく無意味かつ不必要で、合理的説明がない」⁶⁴⁾。こうした

る。スペインでは、ピトリア＝ガステイス大聖堂が1999年から修復見学プログラムを組み、5年間で35万人以上の参加者を集めた。

58) 建築家の手足となるべき現地の助手や設計技師は、マドリッドから派遣される建築家とは異なり、現地で雇用されていた。前任者との師弟関係や地元有力者との姻戚関係を盾に反抗的な者もあり、とりわけエルナンデス・カリエホやロス・リオスは、彼らとの関係構築にも苦心したようである。Rivera Blanco, *Historia de las restauraciones*, 196-197; González-Varas Ibáñez, *La Catedral de León*, 290-291.

59) 立石博高「国民国家の形成と地域ナショナリズムの擡頭」立石博高、中塚次郎編『スペインにおける国家と地域 ナショナリズムの相克』(国際書院, 2002), 28.

60) 鳥居によれば、1865年、スペインの全人口1600万人弱に対して建築家の資格保持者は総数301名だった。1877年には、スペインの人口1700万人弱に対し、建築家総数は397名、うちマドリッド在住が105名、バルセロナ在住が44名だったという。鳥居「ガウディの学業成績」, 12.

61) González-Varas Ibáñez, *La Catedral de León*, 261.

62) González-Varas Ibáñez, *La Catedral de León*, 263; González-Varas Ibáñez, *Conservación*, 175.

63) González-Varas Ibáñez, *La Catedral de León*, 263-264.

64) “La restauración que el Estado está llevando a efecto en la Catedral de León, por medio del Ministerio de Fomento, es una empresa puramente civil y laica; se está restaurando a la Catedral por razón del mérito y del valor de sus fábricas, no en virtud del uso a que está destinado el edificio.” “La intervención del clero en una junta local de restauración artística, que sería completamente inútil y superflua, no tiene explicación racional”. Juan de Madrazo, *Contestación que da D. Juan de Madrazo, Arquitecto Director de las obras de restauración de la Catedral de León, al M. I. Cabildo de ésta* (León, 1878), 21.

考えのマドラーソが、修復事業を本質的に宗教行為とみなし、自分たちの参与を当然のものとして主張した司教および参事会員と全面衝突に至ったのは無理からぬことだった。

根本的な問題は、政治と教会の関係が矛盾に満ちていた点、そして文化財保護の責任者は誰なのか、法整備が不十分だった点にあるといえよう⁶⁵⁾。約一年半で第一共和国が瓦解し、1874年に王政が復古した後も、教会所有美術品の法律的性格の問題は長引き、20世紀まで未解決のまま留め置かれた⁶⁶⁾。

結論：大聖堂は誰のものか

19世紀は、ヨーロッパ各地で中世ゴシック建築が再評価された時代であった⁶⁷⁾。典型的な例が、ゲーテによるストラズブル大聖堂礼賛やヴィクトル・ユゴーの『ノートルダム・ド・パリ』（1831年出版）である。詩人や作家らの文学作品を通して、ゴシック様式の大聖堂が、ある都市ひいては国（ネーション）固有の精神を象徴するという考え方が流布していった。そうした潮流の中で、古代やルネサンスの古典様式による建築ではなく、ゴシック様式の建築を専門的に研究し、修復に携わる建築家が登場してくる。

19世紀のゴシック・リヴァイヴァルには、シャトーブリアン、ピュージン、ラスキンらのようにゴシック建築の本質は宗教性と切り離せないとする捉え方と、ヴィオレ＝ル＝デュクのように合理的建設方法を探求した結果としてゴシック建築を解釈する考え方の両方が存在した⁶⁸⁾。ゴシック建築の再評価や修復に携わった人々が、すべてキリスト教を篤く信仰していたわけではなく、むしろ合理主義や世俗主義の観点から大聖堂に着目する人々がいたという点は重要であろう。歴史的芸術的価値によって古いモノを評価し、公共の文化遺産として公金を費やし、保存修復を図るという、現在に至る文化財行政に繋がるからである。

我々は、先に第2章の記述を、1901年の大聖堂の聖別と宗教儀式の復活で終えた。すなわちミサをはじめとするカトリック典礼が行われる場としての大聖堂の機能の復活をもって、数十年におよぶ「大修復」の終了とみなしたことになる。これはレオン大聖堂の公式見解でもあるわけだが、建築の修復という技術的な観点から見れば、1901年は終わりの年ではない。事実、「大修復、最後の主任建築家」であるラサロのもとで助手を務めていたファン・クリソストモ・トルバードは、

65) 「カトリック教会が国民国家形成において果たした役割は、矛盾したものであった。スペインの穏健派自由主義は、絶対王政を支えた教会の諸特権や不寛容な異端審問制などは廃棄したが、信教の自由と政教分離は求めず、非カトリックの宗教を公けには拒みつつ教会の道徳的規範化を利用しながら国民の一体性を築き上げようとした。」立石「国民国家の形成」、29-30。なおスペインに先駆けて政教分離を進めたフランスでも、宗教建築・美術の管理・保全是問題となり、その行政は複雑化した。谷川稔『十字架と三色旗 近代フランスにおける政教分離』（岩波書店、2015(1997)）；泉美知子『文化遺産としての中世：近代フランスの知・制度・感性に見る過去の保存』（三元社、2013）。

66) González-Varas Ibáñez, *La Catedral de León*, 265.

67) 松嶋明男「近現代ヨーロッパにおけるゴシック様式大聖堂の社会史」坂野正則編『パリ・ノートル＝ダム大聖堂の伝統と再生』（勉誠出版、2021）、229-262.

68) ニコラウス・ベヴスナー『ラスキンとヴィオレ＝ル＝デュク：ゴシック建築評価における英国性とフランス性』鈴木博之訳（中央公論美術出版、1990）；クリス・ブルックス『ゴシック・リヴァイヴァル』鈴木博之・豊口真衣子訳（岩波書店、2003）；ケネス・クラーク『ゴシック・リヴァイヴァル』近藤存志訳（白水社、2005）。

死去する 1947 年まで、大聖堂工事主任建築家として、大聖堂外周の鉄柵工事や、「大修復」中に資材置き場などとして用いられていた回廊ならびに外側ファサードの修復工事にあたっている。トルバードの息子であるファン・トルバード・フローレスがその跡を継ぎ、1963 年にはルイス・メネンデス・ピダルが南側切妻壁の薔薇窓のやりなおしを行った。1966 年 5 月末には、雷により身廊上部屋根の火災が発生し、アンドレス・セオアーネが修復にあたった⁶⁹⁾。

こうした突発的事故による修復とは別に、レオン大聖堂もヨーロッパの他の大聖堂と同様、強風、風雨、さび、鳥によるステンドグラスの傷みや、浸水、交通による振動、大気汚染による石の状態の悪化といった問題に悩まされ続けており、継続的な手当が欠かせない(図 10)⁷⁰⁾。これらの問題の一部は、大聖堂周辺の交通規制と人々の利便性や経済効率との両立をどうはかるかという都市政策にも直結する(図 11)。大聖堂は、ひいては文化遺産は、誰のものか。その保全・修復の責任は誰が負うのか。変容する社会の中で、文化遺産を後世に引き継ぐべきものとの合意を保持していくにはどうすべきか。スペイン初の国定史跡として「大修復」が行われたレオン大聖堂で露呈した諸問題は、現在を生きる我々にも突き付けられている。



図 10 レオン大聖堂、南側外観(修繕のための足場が組まれている)
(2009 年 9 月、筆者撮影)

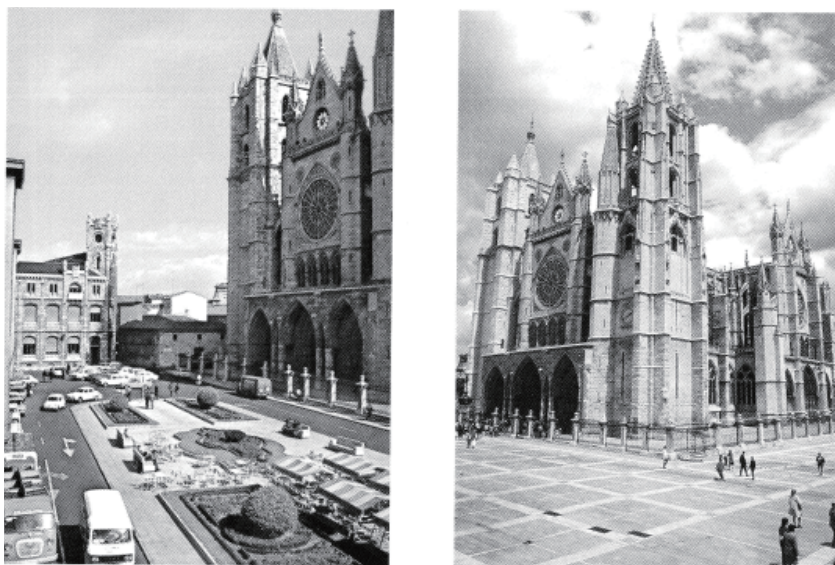


図 11 レオン大聖堂西側正面レグラ広場の変遷(左:1970年代、右:2000年代)
(Antonio T. Reguera Rodríguez, "El desarrollo histórico-urbanístico en torno a la Catedral de León," ed. Jesús Paniagua Pérez, Felipe F. Ramos, *En torno a la catedral de León (estudios)* (León: Universidad de León-Cabildo de la S.I.C. de León, 2004), 278)

69) Villanueva Lázaro, *La ciudad de León*, 263-264.

70) 20 世紀に入ってからレオン大聖堂ステンドグラス修復については、以下参照。
María Ángeles Robles Robles, "Intervenciones en las vidrieras de la Catedral de León en el siglo XX," *En torno a la catedral de León*, 399-409.

参考文献

- Bango Torviso, Isidro, G. “Catedral de León. Desde la instauración de la diócesis hasta la magna obra de Manrique de Lara.” ed. J. Yarza, M. V. Herráez, and G. Boto. *La Catedral de León en la Edad Media*. León: Universidad de León, 2004: 45-57.
- Baumeister, Reinhard. *Stadt-Erweiterungen in teschnischer, baupolizeilicher un wirtschaftlicher Beziehung*. Berlin: Ernst und Korn, 1876.
Accessed September 20, 2023, <https://www.e-rara.ch/zut/doi/10.3931/e-rara-11711>.
- Cruzada Villamil, Gregorio. “Restauración de la Catedral de León,” *El Arte en España* 19, año II, Madrid, 19 de noviembre de 1863.
- Diez García-Olalla, Jorge. *La Catedral de León en 1892-1909. La Restauración de Juan Bautista Lázaro*. León: Universidad de León, 2020.
- DL. “La Catedral de León, el primer monumento nacional de España,” *Diario de León*, 27 de diciembre de 2020.
Accessed September 20, 2023,
<https://www.diariodeleon.es/articulo/cultura/catedral-leon-primer-monumento-nacional-espana/202012270232072073017.html>
- Español Bertrán, Francesca. “La Catedral de León en los dibujos de Richard Roskell Bayne (1865).” ed. J. Yarza, M. V. Herráez, and G. Boto. *La Catedral de León en la Edad Media*. León: Universidad de León, 2004: 595-602.
- Gómez-Moreno, Manuel. *Catálogo monumental de España: Provincia de León*. Madrid: Ministerio de Instrucción Pública y Bellas Artes, 1925-1926 (ed. facs., 2 vols., León: Nebrija, 1979).
- González-Varas Ibáñez, Ignacio. *La Catedral de León: Historia y restauración (1859-1901)*. León: Universidad de León, 1993.
- González-Varas Ibáñez, Ignacio. *Conservación de bienes culturales. Teoría, historia, principios y normas*. Madrid: Cátedra, 4ª ed. 2005 (1ª ed. 1999).
- Herráez Ortega, María Victoria. “La construcción del templo gótico.” ed. J. Yarza, M. V. Herráez, and G. Boto. *La Catedral de León en la Edad Media*. León: Universidad de León, 2004: 145-176.
- Karge, Henrik. “La arquitectura de la catedral de León en el contexto del gótico europeo.” ed. J. Yarza, M. V. Herráez, and G. Boto. *La Catedral de León en la Edad Media*. León: Universidad de León, 2004: 113-144.
- López-Ulloa, Fabian. “Las teorías del gótico y su representación gráfica en España el último tercio del siglo XIX. Un estudio sobre: *Some Account of Gothic Architecture in Spain*, de George Edmund Street.” PhD diss., Universidad Politécnica de Madrid, 2016.
- Madrazo, Juan de. *Contestación que da D. Juan de Madrazo, Arquitecto Director de las obras de restauración de la Catedral de León, al M. I. Cabildo de ésta*. León, 1878.
- Navascués, Pedro. “La arquitectura (del s. XIX).” *Manual del Arte español*. Madrid: Silex, 2003.
- Pérez de Urbel, Justo. *Sampiro, su crónica y la monarquía leonesa en el siglo X*. Madrid: CSIC, 1952.
- Prieto González, José Manuel. *Aprendiendo a ser arquitectos. Creación y desarrollo de la Escuela de Arquitectura de Madrid (1844-1914)*. Madrid: CSIC, 2004.
- Puyol y Alonso, Julio. *Crónica de España por Lucas, obispo de Tuy*. Madrid: Real Academia de la Historia, 1926.
- Reguera Rodríguez, Antonio T. “El desarrollo histórico-urbanístico en torno a la Catedral de León.” ed. Jesús Paniagua Pérez, Felipe F. Ramos. *En torno a la catedral de León (estudios)*. León: Universidad de León-Cabildo de la S.I.C. de León, 2004: 263-283.
- Reuelta Bayod, Aránzazu. “La restauración de las vidrieras medievales de la Catedral de León a finales del siglo XIX.” ed. J. Yarza, M. V. Herráez, and G. Boto. *La Catedral de León en la Edad Media*. León: Universidad de León, 2004: 603-612.
- Ríos y Serrano, Demetrio de los. *La Catedral de León*. 2 vols. Madrid: S. Corazón de Jesús, 1895.
Accessed September 20, 2023, <https://bibliotecadigital.jcyl.es/es/consulta/registro.do?id=13066>.

- Rivera Blanco, Javier. *Historia de las restauraciones de la Catedral de León. "Pulchra Leonina": la contradicción ensimismada*. Valladolid: Universidad de Valladolid, 1993.
- Robles Robles, María Ángeles. "Intervenciones en las vidrieras de la Catedral de León en el siglo XX." ed. Jesús Paniagua Pérez, Felipe F. Ramos. *En torno a la catedral de León (estudios)*. León: Universidad de León-Cabildo de la S.I.C. de León, 2004: 399-409.
- Rodríguez Santocildes, Fernando. "1844 entre sotanas y togas." *Revista Catedral de León* 7 (2019): 20-23. Accessed September 20, 2023, <https://www.revistacatedraldeleon.es/>.
- Sánchez de León Fernández, Ángeles. "El arte medieval y la Real Academia de Bellas Artes de San Fernando." PhD diss., Universidad Complutense de Madrid, 1996.
- [Sin autor]. "175 Aniversario como Primer Monumento Nacional." *Revista Catedral de León* 7 (2019): 11-13. Accessed September 20, 2023, <https://www.revistacatedraldeleon.es/>.
- Street, George Edmund. *Some Account of Gothic Architecture in Spain*. London: John Murray, 1869. Accessed September 20, 2023, <https://www.gutenberg.org/ebooks/41040>.
- Torres Balbás, Leopoldo. "El aislamiento de nuestras catedrales." *Arquitectura* II, n. 20 (1919): 358-362. Accessed September 20, 2023, <https://oa.upm.es/34011/>.
- Villanueva Lázaro, José María. *La ciudad de León: El gótico*. León: Ediciones Lancia, 1986.
- Viollet-le-Duc, Eugène Emmanuel. *Dictionnaire raisonné de l'architecture française du XI au XVI siècle*. 10 vols., Paris: Morel, 1875. Accessed September 28, 2023, <https://archive.org/details/dictionnairerai08viol>.
- 泉美知子『文化遺産としての中世：近代フランスの知・制度・感性に見る過去の保存』三元社, 2013.
- 加藤耕一『時がつくる建築 リノベーションの西洋建築史』東京大学出版会, 2017.
- 酒井健『ゴシックとは何か 大聖堂の精神史』筑摩書房, 2006 (講談社, 2000) .
- 立石博高「国民国家の形成と地域ナショナリズムの擡頭」立石博高, 中塚次郎編『スペインにおける国家と地域 ナショナリズムの相克』国際書院, 2002.
- 谷川稔『十字架と三色旗 近代フランスにおける政教分離』岩波書店, 2015(1997).
- 鳥居徳敏「ガウディの学業成績」『麒麟』(神奈川大学) 15 (2006): 1-30.
- 羽生修二『ヴィオレ・ル・デュク [歴史再生のラショナルリスト]』鹿島出版会, 1992.
- 松嶋明男「近現代ヨーロッパにおけるゴシック様式大聖堂の社会史」坂野正則編『パリ・ノートル＝ダム大聖堂の伝統と再生』勉誠出版, 2021: 229-262.
- ケネス・クラーク『ゴシック・リヴァイヴァル』近藤存志訳, 白水社, 2005.
- フェルナンド・チュエッカ『スペイン建築の特質』鳥居徳敏訳, 鹿島出版会, 1991.
- クリス・ブルックス『ゴシック・リヴァイヴァル』鈴木博之・豊口真衣子訳, 岩波書店, 2003.
- ニコラウス・ペヴスナー『ラスキンとヴィオレ・ル・デュク：ゴシック建築評価における英国性とフランス性』鈴木博之訳, 中央公論美術出版, 1990.
- ジョン・ラスキン『建築の七燈』杉山真紀子訳, 鹿島出版会, 1997.